

欧陽脩研究の現状と課題

小林 義 廣

はじめに

中国社会は、いわゆる唐宋変革を契機として大きな変貌を遂げてゆく。そうした変化の一つに、官僚の出自基盤の拡大があげられる。すなわち、科挙に及第さえすれば、門地や出身を問わず誰でも将来の宰相を夢みられるようになったのである。いわば一種の機会均等主義の出現といえようか。このような科挙を受験して官僚になってゆく人たち、あるいは受験しなくともそれに応ずるだけの教養ある人びとを士大夫というが、私がかねてから、かかる宋代の士大夫を視座に据えて、宋代社会の歴史的特質を探求しようとしてきた。つまり、かれら士大夫が自己を取り巻く様々な現実と格闘しながら、かれらと対峙する社会をどのように対象化し、それを認識しようとしたのか、そしてその認識にはいかなる歴史の意味があるのかを追求しようというのである。一口に言って、その方法は、当時の人びとの社会認識の仕方を通して、宋代社会の歴史的特質を把握しようとするものである。むしろ、こうした方法では必ずしも宋代社会の歴史的特質を客観的に捉えきれないという批判は当然に予想されるけれども、しかしながら当時の人びとの感情や感性の機微に分け入り、そこから宋代社会を当時の生き

た人間の、その内側から捉えることにはなるであろう。それはいわば、すぐれて人間学的歴史理解の一つといえまいか。

ところで、宋代の士大夫といっても、宋朝の建立の当初から、直ちに宋朝らしい士大夫が出現していたわけではない。宋初には、まだ五代以来の遺臣が残存しており、士大夫の気風にも唐宋以来の余臭が色濃く尾を引いていた。このような前代からの遺風を払拭し、宋代らしい士大夫が出現してきたのは、十一世紀の半ば、宋朝も四代目の仁宗の慶曆時代以降だといわれる。この時期、後の世に慶曆の士と称される、同じ政治理念を抱く一群の士大夫たちが現われ、政治改革運動を領導するとともに、他方、旧態依然としていた儒学思想界に新風を吹きこみ、儒学思想の新たな展開をもたらした。この思想運動は、周知のように、それから後の儒学思想の発展に大きな影響を与え、南宋の朱熹らに至って一応の完成の域に達した。小稿が取り上げる欧陽脩は、范仲淹とともに、かかる慶曆の士を代表する人物の一人である。

欧陽脩という名前は、私たち日本人にとっても、かなり馴染みぶかい。というのも、かれを含む唐宋八大家の文章は、いわゆる「漢文」の古典として、現在にいたるまでも学校教育の中で取り上げられつつけてきたからである。他方、中国の人びとにとってその名前は、かれ

の幼児期のエピソードのゆえに、日本人にもまして人口に膾炙してき
たらしい。話はこうである。欧陽脩は四歳で父親の観と死別するが、
若い母親の鄭氏は、脩とその妹の二人の幼い子供をつれて随州（湖北
省隨州）に身を寄せた。そこは、観の弟の擘の任地であったのである。
欧陽脩はその地で成人するが、生活は困窮を極め、紙筆を買う余裕さ
えない。そのため、鄭氏が荻で地面に字を書いて脩を教育した、と。
この「欧母画荻」という話は、「孟母三遷」と同じく、教育に果す母
親の役割の模範として、長く中国の人びとの間に語り継がれてきたと
いう。⁽³⁾

こうした名声のゆえであろうか、これまで欧陽脩に関する論稿や著
作が、日本と中国を問わず相当な数量にのぼってきている。とりわけ、
最近、それも八〇年代に入ってから、大陸中国と台湾で欧陽脩に関
わる論著作や出版物が目立って増加してきているように思われる。一
時期、儒法闘争が喧伝されていたころの大陸では、王安石の新法に反
対の立場をとった欧陽脩にたいして、その文学上の成果を別にすれば、
かなり冷やかな態度であったのとくらべると、この現象は隔世の感が
する。小稿は主に、それらの最近の欧陽脩研究を紹介して、その研究
段階を確認するとともに、これまでの研究上の問題点を洗い出し、今
後の進むべき方向を展望しようというものだ。こうした作業は、私の
ように多少とも欧陽脩に関心を抱いてきたものにとって、研究上の地
歩を再確認し、新たな気持ちでスタート・ラインにつくことを意味す
る。と同時に、それは士大夫の社会認識の仕方を通しての、宋代社会
の歴史的特質の捕捉という、私のかねてからの課題に結びついてゆく。
ただ、本論に入るに先だって、次の点は予め断っておきたい。すな
わち、欧陽脩研究といっても、そこに何らかの単一的あるいは統一的
な方向性があるわけではなく、研究相互の連関性は稀薄で、個別的な
研究がまるで玩具箱をひっくり返したときのように散在しており、し

たがってその紹介は、多分にパノラマ式とならざるをえない、と。原
因はさまざまに考えられるだろうけれども、根本には欧陽脩の残した足
跡が多方面にわたり、しかもそのどれもが魅力に富み、知的刺激に満
ちているという事情があるだろう。言いかえると、どの足跡を辿りそ
こに沈潜しても、一定の研究上の満足感をえられるということが、か
えて欧陽脩研究に統一性を欠くものになっていると思われる。以下、
小稿では、欧陽脩に関わる個別の研究を紹介するとともに、欧陽脩研
究に固有の、こうした問題性をどのように乗り越えてゆくべきか、そ
してその先にはいかなる地平が眺望されてくるかに論議の的を絞って
ゆこう。

一

欧陽脩の活躍とその足跡は多岐にわたり、後世にたいする影響も広
範な分野に及ぶ。多彩な活躍ぶりは、何もかれにかぎらず、北宋中期
の士大夫の多くに共通した現象だが、欧陽脩はその代表的かつ典型的
な事例なのである。それでは、かれの活躍や影響は、どれも同等の価
値を有しているのだろうか。このことについて、在米の代表的な宋代
史研究者である劉子健（James T. C. Liu）氏は、その欧陽脩に関する
著作の中で、次のようなランクづけを試みている。すなわち、文学が
第一で、次いで歴史分野での成果、さらに古典研究の順序で続く、と。
氏の分類は、主に後世への影響力の大小という視角からなされている
けれども、ともかくそれは、研究者たちの大方の見解を代弁している
と考えられる。たしかに、こうした順位に象徴されるかのように、欧
陽脩の文学に関する論及はかなり多い。

文学における欧陽脩の活動は、散文・詩・詞の各分野を含み込む。
とりわけ、散文における活動は旺盛で、その後世にたいする影響も計

り知らない。このことは、かれが唐宋八大家の一人なのを想起するだけで、それ以上の贅言を要しないだろう。こうした事情の反映であるうか、欧陽脩の文学に関する研究は、多く散文に集中しているように思われる。最近の傾向をみても、李栖氏がその詞についての、注釈を中心とする研究を公刊した以外、主流は散文に関する研究となっている。その上、大陸では、その散文にたいする注釈の出版物が多い。欧陽脩の文章は、おおむね簡明で理解しやすいけれども、それでも時として難読の箇所もあり、このような注釈は大いに役立つ。だが、語釈の中には、解釈の根拠を提示せず、そのため利用者に不安を抱かせてしまうものもある。

さて、欧陽脩の文学に関する研究では、少し前のものだが、まず張健氏の『欧陽修之詩文及文学評論』（人人文庫、台湾商務印書館、一九七三年）を挙げねばならぬ。本書は八十余頁という小品であるけれども、欧陽脩の文学（散文・詩・詞）上の特色や、『詩経』研究史上で果たたかれの役割、さらには歴代の詩文作家にたいするかれの評価の紹介など、要するに欧陽脩の文学領域での成果を全般にわたって要領よくまとめ、検討を加えた労作で、以後、この分野の研究に少なからざる影響を与えた。

欧陽脩の文学の特色とは、張氏によると、たとえば次のようなことである。すなわち、欧陽脩は散文や詩において、「簡而有法」（簡にして法有り）ということを繰り返して述べるが、それは平明で自然な調子を目途したものなのだ。また、「載道」ということを主張し、文章は「道」を述べる手段であるがゆえに、作者の人格の錬磨こそ優れた文章を生み出すゆえんであると捉えていた等々。

張氏の指摘で、とりわけ興味を引くのは、「文窮而後工」（文は窮して後、工みたり）という欧陽脩の文学観を取り上げたところである。この指摘は、張氏が初めておこない、以後、欧陽脩の文学に関する研

究の重要な成果として継承されてゆく。「文窮而後工」とは、詩文は作者が困難な状況に遭遇して辛酸をなめつくせばつくすほど、すぐれたものになるという考えである。欧陽脩はその典型を、友人である梅堯臣にみた。梅堯臣の任官は、叔父の詢の恩蔭によるが、恩蔭であるがゆえに順調な出世ができず、長く地位の低い地方官に甘ぜねばならなかった。不遇は不幸を呼ぶ。慶暦四年（一〇四四）には、最愛の妻謝氏や次男を相次いで失った。謝氏の亡くなったときは、貧窮のあまり棺を買ふ余裕さえなく、夫人が嫁入りに着用した衣服で亡骸をつつんで葬ったという。欧陽脩は、こうした梅堯臣の逆境での鬱屈や悲しみこそが事物をみる目を養い、その詩を当代一流のものにしたと説く。が、このことは、欧陽脩自身にもあてはまる。張氏の指摘を継承した蔡世明氏は、度重なる貶謫によってもたらされる失意の状況こそが、「醉翁亭記」や『五代史記』のすぐれた文章を生み出したと記す。

このように、張健氏の著作は、今日、欧陽脩の文学を考察するとき、看過できない内容をもつ。しかしながら、全体の印象からすると、それら文学上の特色や文学観が、内的にどのような有機的連関をもって存在するのか、その統一的イメージが明瞭でなく、バラバラの感じを与える。

欧陽脩の活動で注目すべき第二番目は、史学方面での成果である。この方面については、私もこれまで強い関心を抱き、何篇かの習作を發表してきたので、少し詳しく論じたい。

研究の紹介をする前に、この方面での成果にどのようなものがあるかに言及しておこう。まず、『五代史記』と『新唐書』の二正史を挙げなければならない。前者が私撰であるのたいして、後者は官撰であり、欧陽脩はその本紀・志・表を分担し、該書の上呈に際しては編纂の全責任を負うた。もっとも、現行の『新唐書』は撰者として、か

れのほかに宋祁の名を列ねているが、それは列伝の編纂をした宋祁の功績を没したくないとする歐陽脩の考えに基づく⁽¹⁰⁾。

二正史の次は、後世への影響の大きさから考えて、集古録およびその跋尾、そして族譜(「歐陽氏譜図」)を挙げねばならぬ。集古録は、正史などの文献史料を補訂する目的で、歴代の金石文を拓本にして蒐集したものである。集古録跋尾は、碑文を入手した由来、碑銘の残存状態や形状、年代、あるいは碑文を用いてそれまでの文献の記事を補正したりした文章を記す。集古録それ自体は早くに散逸し、現在、私たちはその有様を集古録跋尾から推測しうるにすぎない。族譜は、江西の廬陵を中心として散居する歐陽氏一族のために、皇祐年間(一〇四九—一〇五三)に編纂され、蘇洵の族譜とともに、宋代以後の族譜編纂の模範をなす⁽¹²⁾。

さて、歐陽脩の史学に関する研究、とりわけ二正史のそれは、日本と中国を問わず最近に至るまで、かなりおこなわれてきた。しかし、両国とも、『新唐書』よりは『五代史記』の研究が目立つ。このことは恐らく、私撰の『五代史記』の方が、官撰の、しかも何人も手になる『新唐書』よりも、歐陽脩の歴史思想を追究するのに好都合だという暗黙の前提によるのだろう。

ここで少し、日本における『五代史記』の研究を概観しておきたい。それは二つの方向に大別できる。一つは『五代史記』の編纂時期の問題であり、もう一つは、該書の内容と歴史的意義は何かという問題である。編纂時期についていうと、『五代史記』が世に出たのは歐陽脩の死後であり、その完成と執筆開始の時期が不明確なために、これまでさまざまな議論が展開されてきたのだ。しかも、該書がかれの生前に日の目をみなかったのは、その中に世人の批判を招きそうな内容が盛り込まれていて、朝廷への上呈にかれが消極的であったからだといわれる⁽¹³⁾。それゆえに、思想内容を検討してゆく上からも、編纂の時期を

確定しておく必要があった。この問題に先鞭をつけたのは佐中壯氏であるが、その後の研究は、佐中論文を踏み台に進展し、ほぼ共通した認識をもつに至っている。すなわち、『五代史記』編纂の実質的開始は、歐陽脩が夷陵県令(湖北省宜昌県)に左遷された景祐三年(一〇三六)前後であり、一応の完成は、かれが『新唐書』編纂に参加する前年の皇祐五年(一〇五三)である、と。

すでに言及したように、編纂時期の確定は、思想内容の解明と深い関わりをもつ。とりわけ、どのような意図と構想に基づいて歐陽脩が編纂に着手したかに着目するとき、編纂の開始時期の確定は、大きな意味をもつて浮び上がってくる。佐中論文の中にもすでに、そうした関心の端緒がみられるが、最近の研究は、ますますこの傾向を強め、『五代史記』の思想内容や歴史的意義の解明に重点を置きつつ、それらとの関連の下に、あわせて編纂開始の時期に言及するようになってきた。芝木邦夫氏の論稿からは、そうした意図が看取できる。しかしながら、これまでの研究では、『五代史記』の思想や論理をいうとき、それらの特徴を個別的に指摘するにとどまっていた、それらの事象が相互にどのような有機的連関をもって該書全体の論理に思想構造をつくりあげているかに、必ずしも十分な注意を払ってこなかった。私は、そうした反省の上に立って、『五代史記』に関する論稿を発表してきた⁽¹⁶⁾。したがって、まず何よりも該書の思想や論理を構造として総体的に捉えようとした。そして、かかる論理に思想構造を生み出す背景となった歐陽脩の現実の社会にたいする危機意識を、かれの直面した現実政治との関わりの中から剔出し、さらにはそうした現実の社会にたいする認識が、かれのいかなる主体的契機に媒介されて、『五代史記』として結晶したかを論じた。その意味で、これまでの研究が有する二つの傾向を内的有機的連関の下に統合し、さらには『五代史記』の思想内容や歴史的意義の探求に新しい地平を切り開くものであった。

中国の『五代史記』研究は、文革から四人組にかけての時期に一つの特徴が見出せる。そして、その時期を挟む前後の研究は、多くの共通点を有しながらも、内容に微妙な差異を含む。そこには、良くも悪くも「動乱の十年」という時間の流れが抜きがたく刻印されている。⁽¹⁷⁾ 文革から四人組にかけての時期を代表する見解は、中華書局から刊行された標点本『新五代史』の「出版説明」(一九七四年)であろう。この「出版説明」は、『新唐書』のそれ(一九七五年)と同様の論調で貫かれている。つまり、この時期に喧伝された儒法闘争論議の影を色濃く反映しているのだ。二つの「出版説明」は、ほぼ次のように述べている。二正史が編纂されたとき、中国社会は、外民族の侵攻と農民起義の多発という内外両面からの危機にままわられていた。歐陽脩ら封建地主階級は、これらの危機を克服するために、「尊孔崇儒」という思想的武器を用いて、民衆にたいする統治を強化してゆく。二正史は、まさにこうした目的に奉仕するために編纂され、それゆえ双方とも「尊孔崇儒」の思想に貫かれている。ところで、歐陽脩は崇儒の家庭に生まれ、幼少から「尊孔読経」し、晩年には王安石の変法に反対を唱えた。こうした態度の当然の帰結として、歐陽脩は歴史編纂を通して、唐代の儒法闘争史を歪曲したのだった、と。以上のような歐陽脩の政治姿勢や思想傾向にたいする鋭い批判と、それに基づくかれの歴史編纂物への極端なほどの低い評価は、この時期の特色をなす。こうした現象は、四人組打倒以後、あるいは文革以前の研究にはみられないものである。

文革以前の『五代史記』研究は、清朝まで蓄積されてきた伝統的な見解を多く受けついで。たとえば、『五代史記』や『新唐書』が旧史を大幅に書きかえ内容を豊富にできたのは、資料として実録などの公式記録以外に、小説や野史の類を採用したからだとか、二正史は、義例という、いわば書籍編纂上の主義とそれに基づく凡例を厳守してい

るとか、志・表にすぐれた特色をもつ(とくに『新唐書』の場合)等々。むろん、こうした伝統的な見解にばかり終始しているわけではなく、そこには新中国になってからの清新な息吹を容易に感じとれる。一例を趙呂甫氏と柴徳廣氏の『五代史記』に関する叙述にとってみよう。⁽¹⁸⁾ まづ趙氏から。該書は、事実を事実としてそのまま記すことを特色とする。このことは、階級間の矛盾と衝突をも隠さず率直に記すのを意味する。だが、歐陽脩は、その提示を通じて逆に、矛盾の調整と緩和を「封建主」にうったえようとしたのである。このように、歐陽脩の思想が些かの人民性を有し、その史学思想に進歩的要素を含むのは、若いとき生活苦から下層社会の人びとと接触していたからだ、と。また、柴氏は次のように述べる。『新五代史』が『旧五代史』に比べて南宋以後、とりわけ金の章宗以来、名声を博するようになったのはなぜか。一つにはそのすぐれた文章に起因するだろうけれども、しかし何よりも大きな要因は、『新五代史』の方が封建統治にとって好都合であったからにほかならない。すなわち、『新五代史』は『春秋』に範をとったが、『春秋』は尊王を重視する思想であって、歐陽脩はそれを借用して、五代におけるような悪天子にさえ忠節を尽くすことを説いたのだ。また、『春秋』は攘夷の思想を特色とするが、『新五代史』では桑維翰伝とその伝論にみられるように、そうした思想は稀薄である。このように『新五代史』は、夷狄の王朝を含む封建統治者にとって、どんな王朝であれ忠節を求めるのだから、好都合この上ないものであった、と。⁽¹⁹⁾

以上のように、文革以前の新中国の研究は、伝統的な『五代史記』評価を継承しつつも、そこに階級史的視点を導入し、歐陽脩の史学は結局、封建地主階級に奉仕するためのものと結論づける。だが、階級史的視点の堅持が、直ちに歐陽脩の史学全体にたいする低い評価に短絡しない。主に史料の側面からではあるけれども、応分の評価を与

えている。そこが、文革から四人組にかけての時期の研究と異なる点である。

次に、四人組以後の研究情況について言及しよう。特徴の一つは、文革以前の研究と同じように、伝統的な『五代史記』評価を多く取り入れていることだ。たとえば、陳光崇氏は、その論文で歐陽脩の史学の特色を、錢大昕・王鳴盛・趙翼ら清朝考証学者の意見を引用して指摘している。⁽²⁰⁾ いわく、義例が謹嚴である、表を復活させた、多くの史料を参照して旧史の史料の欠陥を補った、旧史に比較して文詞が簡略だ等々。だが、記述の全てが伝統的見解の受け売りというのではない。そこには、解放後の、更にいえば文革をも経過してたどりついた後の、現代中国人研究者の立脚点と結論が顔を出している。陳氏の指摘を続けよう。倫理道徳は五代に混乱の極に達し、宋初には封建統治の必要性からその修復と完備が急務であった。歐陽脩は、『新五代史』の編纂を通して、かかる時代の要請に応えようとした、と。陳氏のこの捉え方は一見、既述の「出版説明」と軌を一にするように思える。『新五代史』が宋朝の封建統治という目的のために編纂されたと述べているからである。しかしながら、両者の間には、封建統治の根幹を形づくる道徳・倫理をめぐって、大きな見解の相違がある。「出版説明」では、道徳・倫理というだけで、それは宋朝統治者の民衆支配の手段にすぎなかったとマイナスの評価しか与えていない。これにたいして、陳氏は道徳・倫理を、人と人、あるいは人と社会の関係を整える規則であって、それは一定の社会条件に応じて出現し、封建社会においては五倫五常であるが、五倫五常は封建社会の枠内ではそれなりの正当性を有するものであったと説く。つまり、ここには儒家道徳というだけで低い評価を与えていた態度は姿を消し、歴史的条件を考慮に入れながら、それを客観的に評価しようとする姿勢が滲み出ている。客観性を支持する姿勢は、更に歩を進めると「实事求是」の尊重に結びつ

くだろう。周知のように、この語句は四人組以後の研究論文において肯定的な評価を下すときによくみられるが、陳氏は欧陽脩が多くの資料を用いて旧史を補訂したことを、「实事求是」と述べて高く評価しているのである。四人組以後の新しい気運を容易に感じとれるではないか。⁽²¹⁾

以上、主に『五代史記』に関する研究を紹介した。ところで、既述のように『新唐書』についての言及は、『五代史記』に比べるとそれほど多くはない。日本の研究において、その傾向が特に著しい。その理由については先きに、『新唐書』が何人もの手を経た官撰の書物であって、欧陽脩の史学思想を辿りにくいという点に基因するのではないかとこの憶測を述べておいた。他方、中国の研究においては、日本の場合と比べると言及の機会は多いけれども、単独で取り上げられることは稀であって、多くは『五代史記』との関連の下に、そこに表出している欧陽脩の史学思想を、より鮮明にするための補助史料としての役割に終始しているように思われる。言いかえると、『新唐書』それ自体の論理あるいは思想を全体として明らかにしようとするものとは考えにくい。

とはいうものの、こうした取り扱いしか受けていない『新唐書』も、次に述べるような観点に立てば、そこに新しい地平が切り開かれてゆけるではなからうか。宋代には范祖禹の『唐鑑』を初めとして、唐代に関する史書の編纂が多く、その上、士大夫の文章にも唐代の史実を典拠とする議論が数多くみられるように感ぜられる。このことは、宋代の人びとの唐代にたいする関心の高さを示す証左となろう。宋人はまた、自己の時代に先だつ混乱の時代である五代にも強い関心を抱いていた。そして、それは単なる関心の閶を超えていた。そうした混乱の時代を正面に据え、それを積極的にみつめ直すことを通じて、かれらは自己の時代とその抱える問題を再認識し、自分たちの進むべき方

向を指し示す道標を追い求めていたのである。⁽²²⁾ 唐代は、かかる意味を有する五代に先行する「盛世」の時代なのだ。だが、その「盛世」も、やがては五代という「衰世」に継続する運命を担った存在であった。欧陽脩が晩年、息子に『新唐書』列伝を音読させ、とりわけその藩鎮列伝の序論の文章を歎賞したというエピソードは、⁽²³⁾ 単に表現技術に感心したのではなく、その背後に如上の歴史意識が働いていたと考えられないだろうか。同じく自己の時代を「盛世」と捉えていた宋代の人物にとつて、かかる唐朝の盛衰は他人ごとではなかったはずである。北方や西北の異民族からの絶えざる脅威は、こうした危機意識を増幅したにちがいない。とすれば、いつまでも「盛世」でありつづけ、前代の轍を踏まないためには、唐代の歴史は絶好の鑑鏡であったのではなからうか。このようにみえてくると、唐代から五代にかけての歴史を宋人が熱心に探求した理由も自ずから理解できようが、それならば、その「盛世」を現出した唐代の歴史の中に、かれらはどのような王朝国家の理念像を追い求めようとしたのか。これについては、これまでの研究で必ずしも明らかになっていない。『新唐書』が官撰であるがゆえに、一個人の史学思想に還元できないとするならば、宋代の人物との唐代観といった文脈の中で、もう一度、該書研究の態勢を整えて進めてゆく必要があるのではなからうか。この方向で考えてゆくとき、編纂年代も近く、しかも私撰である范祖禹の『唐鑑』は一つの手掛りを与えてくれよう。范祖禹は、宋代を代表する史書である『資治通鑑』の唐五代の部分の編纂に司馬光を助けて尽力した人である。宋代の人物との唐代観を探求するとき、当然、『資治通鑑』は考察の対象になることを思えば、『唐鑑』研究の重要性が浮び上がってくる。

少し史学方面に紙数を割きすぎた。次に、欧陽脩の活動として注目すべき第三番目の経学に論を進めよう。かれは経学に新風を吹きこん

だといわれる。宋初までの注疏を墨守して經典を解釈する方法から脱却し、経文それ自体から經典の本義を明らかにしようとしたのである。とりわけ、『春秋』『易』『詩経』をめぐるかれの意見や解釈は、後世への影響も大きい。かかる特色を有する欧陽脩の経学については、日本でも戸田豊三郎氏の「欧陽脩の易学」(『東方学』二五輯、一九六三年)と題する専論を初め、中国思想史と銘を打たれた概説書などに必ずといってよいほど言及されてきた。

近年、何沢恒氏は、欧陽脩の経学に関するまとまった成果を発表した。『欧陽修之経史学』(国立台湾大学文史叢刊五四、一九八〇年)と題するその書物は、直ぐ後で記す一点を除けば、個々の指摘には特に目新しいものはない。が、ともかく本書は、欧陽脩の経学と史学の諸特徴についてくまなく目配りした総合的な著作であるので、これらを俯瞰するには便利である。本書の特色はむしろ、個別の事象の指摘にあるのではなく、欧陽脩の経学を論じつつ、それが史学とどのように関わるかに注意を向けている点にある。その関わり方の詳細は、次節で触れるのでここでは省く。ところで、欧陽脩の経学の特徴について、何氏の指摘で興味ぶかいのは次の点である。すなわち、欧陽脩の文章家としての性癖が、伝注の文辞相互の間に存する矛盾や混淆をみぬくことに充分に役立ち、そしてそれらの存在こそが、伝注にたいする信頼を失わせ、経文それ自体からの解釈を提唱するに至ったのだというのである。これまでの研究でも、欧陽脩が伝注に基づく經典解釈に疑義をさしはさんだのは、かれの合理的・論理的な思考法によるとしてきた。だが、そうした思考法が、どこに淵源するのかまでは論及されてこなかった。その意味で、何氏の議論は、従来の見解から更に一步踏み込んだものといえよう。

以上、欧陽脩の活躍した諸分野、とりわけ文化面でのそれについて、その活動の内容と研究の簡単な紹介をしてきた。しかしながら、こう

した紹介をいかに微細にしても、欧陽脩という時代に傑出した人物の、その全体像は浮び上がってこないし、かれの歴史上に果たした役割の全体も解明できない。そこで、次に節を改めて、これまでの研究ではどのような問題をどう捉えているか検討してゆこう。

二

欧陽脩の諸方面にわたる活躍の有様を初めて全体的に論述したのは、劉子健氏である。一九六三年に中国語版が出版され、一九六七年には中国語版をもとに英文による改訂版が出された。⁽²⁴⁾ 両書の詳しい内容については、すでにそれぞれに関する多くの書評で言及されており、とりわけ中国語版の方は、斯波義信氏の丁寧な紹介と批評があつて、日本の読者にも広く知られていると思われる。そこで小稿は、内容の紹介については必要な程度にとどめ、主に両書の間にもみられる差異に着目したい。

第一は構成上の相異である。中国語版は、大きく上篇と下篇に分かれ、前半の上篇では、欧陽脩の学術・思想・文学における諸成果と、かれの信仰問題という、いわば文化的諸側面が取り上げられ、後半の下篇では、欧陽脩の政治家としての経歴と業績が語られ、そしてかれと関わるかぎりでの北宋政治史が記述されている。英文版の構成も、前半部と後半部に大別できるが、各部の内容は中国語版と正反対である。本版は全部で十二章からなり、一章がプロローグ、十二章がエピソードであるので、それらを除くと、二、六章が宋代政治史あるいは欧陽脩の政治家としての経歴を記し、七、十一章が学術・文化・思想などにおける欧陽脩の成果にあてられている。

第二は、英文版の第二章の存在である。本章は、中国語版にはない宋代全般の歴史的位置づけについての劉氏の見解が披瀝されている。そして、この章の存在こそ、英文版が欧陽脩という個人を扱いながら

も、一個人の伝記に終わることなく、むしろ北宋の政治や社会といったものを語るうとしていたのだ、と印象づける役割を果たしていると考えられる。中でも注目すべきは、恐らく宮崎市定氏ら日本のいわゆる「京都学派」を主に意識したと思われるのだが、宋代を「ルネッサンス」あるいは「近代初期」と捉える考え方に疑義を挟み、氏独自の宋代観を提示したことだろう。すなわち、このような考え方は、「ルネッサンス」以後、どうして中国社会が一層の進歩を遂げて、「近代後期」を現出できずに、むしろ停滞的ともいえる社会が継続したのか説明できないという。氏はかかる批判の上に立って、まず中国社会の歴史的特質を、古代以来の強い文化的継続性とその時々にかかる変化が複雑にからみあつて進行するものと捉える。そしていう。宋代は、唐代後半期に起こった変化と古代以来の恒常的文化が混り合い、「新しき伝統(neo-tradition)」を形成する途上の段階にあつた。「新しき伝統」は長い時間をかけて「穏やかに」形成され、しかもそれは民衆レベルまで浸透したので、以後、「急激な」「徹底的な」変化を拒絶し、保守的な傾向を促進した、と。ちなみに、本章は、氏の先行する二論文「The Neo-Traditional Period (Ca. 800—1900) in Chinese History」⁽²⁶⁾、「Sung Roots of Chinese Political Conservation: The Administrative Problems」⁽²⁷⁾のエッセンスをなす。

第三は、英文版のエピソードである。本章は、中国語版にはない本書全体のまとめを行っており、欧陽脩の全体像にたいする劉氏の考えが、ここからも窺える。その考えについては、少し後に触れることにしよう。

両書の相異の最後は、文章表現である。英文版は、中国以外の文化圏の人びと、とりわけ西洋人に読んでもらう目的で書かれているので、その言いまわしも、譬えも欧米の人びとに分かるような心遣いが感ぜられる。そして私たちにとっても、何よりも有益なのは、中国語版で

は引用史料を著者がどのように解釈しているか充分に窺い知れないところでも、英文版は事柄の性格上、引用文を英文に翻訳あるいは要約していて了解できる点である。

それでは、劉子健氏は、これら両書をどのような意図の下に論述しようとしたのだろうか。その一つは、両書それぞれの「引言」や「プロローグ」に窺える。氏はいう。欧陽脩が各分野で挙げた成果については、諸書の中に論及されているけれども、かれを全体的に取り扱った専著はない。そこで筆者は、これら従来の個別研究を参考としながらも、欧陽脩の生きた時代背景を考慮に入れて、総合的な分析を試みようとした、と。氏の目途する意図は、両書において一応の達成をみたといえよう。というのも、両書とも欧陽脩の残した諸成果を網羅的に取り上げ、それぞれの歴史的地位を簡明に記し、その点で、欧陽脩の活躍の全体を俯瞰できるようにしたからである。

しかしながら、全ての網羅が欧陽脩の全体像を、総合的かつ統一的に捉えたことを必ずしも意味しないだろう。総合的かつ統一的に捉えるためには、個別事象を結びつけ、それらを整理するのに必要な視角がなければならぬ。氏の著作からは、そうした統一的視角といったものが感じとれないのである。その結果、欧陽脩という人物のイメージを拡散させてしまったのではなからうか。

ところで劉氏は、単にそれまでの欧陽脩に関する個別研究を統合しようとしただけではなく、それらの上に立った独自の展開をめざしていた。英文版の「プロローグ」にいう。「高い山に登るとき、登るにつれて山のまわりの視界が開けてゆくように、歴史上に傑出した人物を研究すると、その生きた全時代の眺望を私たちに与えてくれる」と。つまり、氏は欧陽脩という時代に傑出した人物を通して、かれが生きた北宋中期の中国社会の歴史的特質を考察しようとしたのだ。だが、時代の特質を解明する媒体となるべき欧陽脩像が、上述のように分散

していて、明確な焦点を結ぶに至っていないのである。当然、欧陽脩を通して北宋中期の時代相を讀者に印象づけるという所期の目的は、成功するに至らなかった。この欠陥を端的に示すのは、欧陽脩の残した諸成果や貢献と、北宋時代の社会や経済構造といったものとの関係についての叙述である。氏は、欧陽脩の残した諸成果は諸成果、政治や社会の動きはそれらの動きとしてバラバラに叙述し、これら双方がどのような内的有機的連関をもっているかに言及はしていない。そもそも、中国語版にしても英文版にしても、欧陽脩の文化・学術などにおける諸貢献を叙述した部分と、かれの政治生活を記した部分とに大きく分けてしまったこと自体が、こうした欠陥を何よりも明瞭に物語っているといえまいか。このようにみると、英文版の「エピローグ」で氏が下した欧陽脩にたいする総合的評価は、それだけが独り歩きをし、浮いてしまっているように思われる。氏はいう。欧陽脩は多くの分野での開拓者や創造者であって、それ以後の歴史の中で様ざまに展開してゆく基点にすぎなかった、と。この評価は、著作の冒頭に掲げている目的にたいする結論としては極めて不適当であるし、そして、何よりもそれによって氏の著作のもつ本質的な欠陥を何ら補うものとはなりえていないのである。

とまれ、劉子健氏の著作は、如上の特色と欠陥を有しているけれども、それは欧陽脩に関する初めての「総合的」な書物であったため、以後の欧陽脩研究に大きな影響力を及ぼした。次に、劉子健氏以後の著作が、氏をどのように継承し、それを超えようとしていったかを見てみよう。

劉氏以後、欧陽脩を「総合的」に捉えようとした著作で最も注目すべきは、蔡世明氏の『欧陽脩の生平与学術』（台湾、文史哲出版社、一九八〇年）である。この書物は、「上篇 欧陽脩の生平」と「下篇 欧陽脩の学術」とに大別できる。上篇は、欧陽脩の政治家としての経歴や、

処世上の態度などを中心に描く。下篇は、欧陽脩が文化・學術・思想上などで貢献した諸成果と、かれの宗教にたいする態度を記す。本書はこのように、上篇・下篇を通して、欧陽脩の全体像を明らかにしようとしている。管見によるかぎり、これまで日本では本書への言及はないように思われるので、まず上・下各篇を構成する各項目とその内容を簡単に紹介しておきたい。

上篇の最初には、本篇の各章に入る前に、欧陽脩の政治的生活に関する総括を載せている。すなわち、欧陽脩の活躍した仁宗時代の知識人は、単なる儒家經典の解釈者ではなく、その実践者であり、政治と文化の指導層であった。言いかえると、仁宗期は、学者が政治を把持する時代であった。欧陽脩は、そうした新しい官僚の一典型である。と。以上の総括のあと、次のような項目が並ぶ。全部で三章である。

第一章「身世与求学経過」は、誕生から科挙合格までの生長過程を記す。第二章「従政歷程」は全部で六節から成り、各節を通して欧陽脩の政治経歴を示す。第三章「為人処事」は五節に分かれ、欧陽脩の人の柄、事に処するときの態度、後進を盛んに推挙したことなどが記され、第五節は三章の小結となっている。

下篇の最初も上篇と同じく、該篇の総括である。すなわち、欧陽脩の学問にたいする貢献は、広範囲に及び、個々の分野に専心できなかったため、それぞれの深い探求はなされなかった。だから、後年、門人たちが個々の分野で師を凌駕するに至ったのだ。だが、欧陽脩の学問の開拓者としての価値は依然として大きい、と。総括のあとには、次のような各章が続く。第一章「欧陽脩の経学」。本章は五節に分かれ、欧陽脩の經典解釈における基本的態度、『詩経』と『周礼』や、それにかれの重視した『易』と『春秋』に示した独自の認識、経学史上における欧陽脩の位置といったものを記す。第二章「欧陽脩の史学」。本章の最初において、清朝の章学誠で有名な「六経皆史」という經典

にたいする見方が、すでに欧陽脩にもあったと指摘する。この指摘は、劉子健氏の記述をそのまま継承したもの。本章は三節から成る。第一節「欧陽脩の史学方法」では、欧陽脩が古代の歴史には極めて懐疑的態度で対処していたこと、金石文を収集し後世の金石学の道を切り開いたこと、『崇文総目』の編纂に参画したこと、かれの生きた当時の史料保存にも注意を怠っていなかったこと、「欧陽氏譜図」を作成して宋代以後の族譜の模範となったこと、を記す。第二節「欧陽脩の歴史観」では、かれの正統論と道義を重視する歴史観とを紹介する。第三節「欧陽脩の史学名著」は、欧陽脩が編纂にたずさわった『新唐書』と『五代史記』の紹介である。第三章「欧陽脩の宗教思想」。本章は四節で構成され、それら各節を通して、欧陽脩の仏教や道教にたいする批判と、かれの信仰とを扱う。第四章「欧陽脩の文学」。本章は四節から成り立つ。第一節は、唐代から宋初までの古文復興運動史と、古文復興運動に果した欧陽脩の役割を記す。第二節は欧陽脩の文学観を扱う。本節は劉子健氏や張健氏の指摘を大幅に取り入れた叙述となっている。その指摘とは、欧陽脩の次のような文章観である。すなわち、文章は書く人の内面が充実してこそ立派になる（「道勝文至」、文章作成の要諦は「簡而有法」にある、文章は作者が困難な状況に追いこまれるほど精彩を放つ（「窮者益工」）。第三節は、欧陽脩の文学作品の特色を記す。まず、散文の特色とは、次の四つだという。(1)平易で伸びやかである（「平易條暢」）、(2)穏やかにして雅やかである（「温醇雅正」）、(3)抑揚が軽微で論理に飛躍がなく、冷静な筆致をとる（「陰柔之美」）、(4)声音の美に気をつかい、余韻を醸し出す（「情韻旖旎」）。次いで、欧陽脩の四六文・詩・詞の特色を述べる。すなわち、かれの四六文も詩も極めて散文的であったので、その二つで失われた情感を詞を作ることで満足した、と。第四節「欧陽脩の文学批評」は、歴代あるいは当代の文学者にたいする欧陽脩の評価を、張健氏らの先行研究を

参考にして取り扱う。ここで取り上げられているのは、李白・杜甫・韓愈・柳宗元・蘇舜欽・梅堯臣にたいする評価である。第四章が終わると、本書全体の「結論」が最後に続く。そこにおいて蔡氏は、歐陽脩をあらゆることに精通した「通人」という評価を下して締めくくっている。

以上が本書の概略であるが、全体を通して次のような特色に気づく。すなわち、歐陽脩の政治や学術の成果にたいする、微に入り細に入った叙述である。この点、劉子健氏の著書の内容を更に精緻にしたと考えられ、本書の大きな特色をなす。こうした特色は、本書の到る所で歐陽脩に関する史料、とりわけ根本史料である『歐陽文忠公集』の丹念な検討が施されていること、と同時に歐陽脩に関する先行研究の精力的な消化が試みられていることと深い関わりがあると思われる。その意味では、本書を歐陽脩に関する、すぐれた研究の一つとして推すことに躊躇はない。

それでは、蔡氏は本書を通して、どのようなことを主張しようとしたのだろうか。本書の劈頭に掲げられている「自序」は、そのことを率直に語っていると考えられる。「自序」にいう。中学時代から歐陽脩の文章を読み、その平易にして情感に富む筆致に引きつけられ、歐陽脩を対象とする研究を纏め上げようとした。だが、そのうち劉子健氏の著作を読んだりして、歐陽脩の文学を主とする研究という所期の目的が、そんな簡単に達成できないと気づいた。つまり、欧陽脩は文章を書くことを通して、聖賢の「道」を発揚しようとしたのであり、むしろ聖賢の「道」を身に備えてこそ、文章が初めて生きてくると考えていたのだ。そして、欧陽脩の学術体系は、かかる思想を根柢としており、「道」こそかれの学問の中核であり、文学の創作における原動力であった。そこで、当初の計画を変更して、欧陽脩の学術全般の検討をすることになった、と。

「自序」をみるかぎり、蔡氏は「道」という欧陽脩の学術全体に通底する思想概念を手掛りに、欧陽脩の全体像を捉えようとしていると考えられる。だが、こうした意図が本書の実際の記述に生かされているかといえ、その答えは否定的にならざるをえない。というのも、「道」なる概念を核とした論理的統合性あるいは整一性といったものを、本書から窺うことができないからである。この欠陥は、上述した本書の特色である精緻さと深い関わりがあると思われる。すなわち、劉子健氏の著書と比較すると、本書の特色は、叙述内容の精緻さにあるのだが、精緻さのみに精力を費す結果、叙述全体の枠組みが劉氏の設定から脱却できないという矛盾を背負い込んでしまったのだ。極論すると、劉氏が提示した基本的な枠組みに沿って、本書は叙述内容を詳細にしたといえよう。このことを端的に示すのは、各章・各節の最後の結びの部分が、劉氏の著作からの引用で多くを占め、劉氏の評価や判断があたかも蔡氏の意見であるかのように取り扱われている点である。「道」という思想概念で欧陽脩の全体像を捉えようと志向しながら、結局、劉氏の著作がもっていた根本的な欠陥、すなわち欧陽脩の残した諸成果の有機的内的連関を欠いた叙述という欠陥を、何ら克服できないままに終わったのである。

このようにみてくるとき、何沢恒氏の『欧陽修之経史学』は、注目してよい近年の成果といえよう。というのも、本書は経学と史学という限定された範囲での叙述ながら、その間の連関を追求し、これらの分野における統一的な欧陽脩像を作り上げようとしているからである。蔡氏の著作では、この二つの間の連関さえも、必ずしもうまくいっていないかったのだ。

何氏の著書は、大きく三つの部分から成る。初めが「導論」で、分量こそ少ないけれども、北宋の慶暦年間を中心とした歴史環境や思想状況を述べ、その上、そうした状況の中で、欧陽脩がどのような役割

を演じたかを概括して、本書全体の意図するところが那邊にあるかを示す点で重要といえよう。次いで「上編」は欧陽脩の經学上の諸業績を記し、「下編」では欧陽脩の史学を取り上げる。それでは、何氏は欧陽脩の經学と史学を、どのような連関の下に捉えようとしているのだろうか。この点を、主に「導論」から探ってみたい。

何氏はいう。宋朝は開国当初から幾多の困難に遭遇し、こうした問題の解決に当時の「名臣学者」は大きな関心を抱いていた。かかる状況は、經学をも治道を中心とする探求に向かわせる要因となり、かくて『周礼』と『春秋』が重視された。一方、宋朝は唐末・五代の混乱を経て統一されたばかりで、その国勢は隋唐や元明清に遠く及ばない。こうした衰弱の世には、かえって前代の歴史を顧みて、そこに薬石を求めようとする史学が盛んになる。かくして、經学における『春秋』の重視とも相まって、新しい宋代の史学が誕生した。『新唐書』『新五代史』『資治通鑑』は、そうしたものの代表である、と。

何氏は上述のような具合に、欧陽脩の經学と史学を統一的に捉えようとしたのである。しかし、その結合の論理は、多分に形式的・外面的にすぎよう。思うに、その最大の原因は、宋代の經学と史学が起こってくる背景としての、北宋朝の当面した政治・社会状況などの分析が不十分だからではないのか。さらに言うと、開国以来、宋朝の当面した政治問題というのが、あまりに抽象的あるいは一般的すぎて、特殊代表的な問題像が浮び上がってこないのだ。したがって、当時の「名臣学者」が、なぜこぞってそうした政治問題に関心を抱いたのか、曖昧になっており、結局、經学や史学とその時代背景との間の関係を、言葉の上で無理につないでしまったという感じをぬぐえない。

この形式的・外面的という欠陥は、本書全体を貫く性格にもなっているような思われる。本書の叙述の特色は、欧陽脩の經学と史学について、後世の学者の批評を紹介し、それらの評価に賛意あるいは反対

の意思を示すことを通じて、欧陽脩の見解を浮き彫りにするところにある。この方法は、欧陽脩の学問の評価をより客観的に捉える点で有効であろうけれども、それに規定されてその学問内容を外面的考察に終わらせ、かれの文章それ自体に即した内面からの理解を困難にしているのではないか。このようにみえてくると、何氏の場合も、欧陽脩像の眞の統一的把握には至らなかったといえよう。

以上、劉子健氏・蔡世明氏・何沢恒氏の著作を取り上げてきたけれども、そこに共通してみられる現象は、欧陽脩の全体像を統一的整合的に捉えようとする意図は濃厚にもちながら、眞にそれを把握するための視角が欠如しており、結果として欧陽脩の諸足跡をせいぜい網羅するだけに終始してしまったことである。欧陽脩の全体を論じようとしたものには、このほか、郭預衡氏の「論欧陽修」⁽²⁸⁾と題する論文がある。この論文も如上の欠陥を共有するが、従来の研究にはない新しい指摘や論点を含むので、煩瑣をいとわず紹介しておこう。新しい指摘とは、欧陽脩の仏教批判に関してである。この問題については、これまで欧陽脩の「本論」という文章を取り上げて論ずるのみであったが、郭氏は、欧陽脩晩年の著作である「集古録跋尾」を引用して、欧陽脩の仏教批判が晩年まで続いたことを立証した。

さて、郭氏の論文は、主に文人としての欧陽脩に光をあて、その全体像をできるだけ客観的かつ実証的に捉えようと試みている。ところが、こうした視角からすると、一見、論文の整合性を破ると思われる欧陽脩の政治的立場にたいする氏の見解が、かなりの紙数を費やして披瀝されている。これはどうしてなのか。一口で言えば、それは欧陽脩の政治的立場への大陸中国における従来の評価にたいする不満に基づくらしい。すなわち、それまで北宋の文章家を評価するとき、その判断の基準は、王安石の新法にたいする態度であった。新法に反対した欧陽脩は、当然、保守派とみなされ、そのことがかれの文学上の声

眷にも影響を与えていた。郭氏はこのような通説にたいして、歐陽脩は確かに新法に反対を唱えたけれども、新法派と意見が違ふというところだけで保守派ときめつけるわけにはいかなないとして、歐陽脩の革新性を実証しようとした。すなわち、氏は説く。歐陽脩は慶暦の改革で、政治の改革を熱心に主張したのであり、その情熱からすると、晩年になって保守派になったとは考えにくい。その上、かれは王安石の新法の時期にも、朝廷と庶民への責任を貫こうとした。ただ、その実施方法や政策内容が王安石の考えと異なるので、反対意見を述べたのである。このように、かつての改革への情熱は依然としてもち續けていた、と。

郭氏の見解が当をえているかどうかは、直ちに判断することは困難だが、ともかく歐陽脩の政治的立場にたいする新しい論点を提出したとはいえよう。だが、氏のこうした言及は、ただでさえ歐陽脩の学問上における諸成果の羅列という感じのする本論文に、統一性の欠如と混乱をもちこむ結果になってしまった。なぜなら、歐陽脩の政治的立場と他の文人的側面への論述とが、何ら積極的な内的連関をつけずに放置されたままになっているからである。

大陸中国において、郭氏以外に歐陽脩を何らかの意味で全体的に扱ったものに、管見のかぎりでは、張華盛氏の『歐陽修』²⁹という小冊子がある。この書物はしかし、歐陽脩の文章にたいする注釈を主体としており、かれの諸業績と足跡への論及は、それらの注釈に入るにあたっての読者サービスという性格をまぬがれない。したがって、叙述の内容は、これまでの指摘を多く出るものではない。

以上、かなり煩瑣にわたったけれども、歐陽脩の足跡を統一的かつ整合的な視角から捉えた研究は、まだ現われていないことを明らかにできたと思う。私にしても確固不動の視角をもって見るわけではないが、次に節を改めて、それらの方向を探る努力を試みよう。

三

歐陽脩の諸方面にわたる足跡を統一的に捉えようとするとき、劉子健氏の著作にたいする一つの批評が手掛りを与えてくれよう。その批評とは、プーリイブランク氏のものである。氏は次のように説く。³⁰劉氏は、歐陽脩にたいする良い評価や悪い評価が、一体、かれの生きていた時代の習慣に基づいて下されたものか、それとも超時代的な基準によるのかという点にあまりにもこだわりすぎている。歐陽脩のようになすぐれた人物を考察する場合、より重要なのは、そうした点ではなく、かれのもつ相反する傾向性——一方では極めて知的冒険心に富むかと思えば、他方でいつの時代にも底流を貫いて変らないものの存在——をどのように理解するかである。このような見方に立つとき、劉氏の叙述はあまりにも伝統的な伝記のスタイルに忠実だ³¹というべきで、歐陽脩の私生活には深く立ち入っていない、と。

プーリイブランク氏の批評は短文のため、具体性に乏しく理解のできない点もあるが、氏が提示した課題を私なりに受けとめて敷衍してゆくこととなる。欧陽脩のような時代に傑出した人物には、当然、当代の人びとの先頭に立って、新しい時代を切り開いてゆくという積極的な側面がある。それとともに、かれらはまた、いつの時代にも変らない、いわば中国社会を根柢から基礎づけている深層部分を有する。この両側面は緊張を孕むがゆえに、個人の内面の葛藤を生み出す。だが、その葛藤は、かれらが時代に傑出した存在であるために、単なる一個人の領域を超えて当該段階の歴史社会のアンビバレンスに結びつく。逆の言い方をすれば、個人の葛藤が当該の歴史社会の有する何らかの対抗・矛盾を象徴するからこそ、個人の抱える葛藤が歴史の意味をもち、かれを時代に傑出した人物たらしめるといえる。とすれば、欧陽脩研究を単なるディレクティブに墮することな

く、宋代社会の歴史的特質を解明する手掛りの一つと位置づけるとき、如上の観点で、かれの諸足跡を統一的かつ整合的に把握する重要な視角として浮び上がってくる。すなわち、まず当該の歴史社会のアンビバレンスに結びついてゆく欧陽脩の葛藤をみつけ出し、その構造を具体的に分析すること、次にそこで明らかにされた点をもとに、かれの諸足跡を改めて検討し整序づけることが要請される、と。

それでは、欧陽脩の内面におこった葛藤にはどのようなものがあるのか、そしてそれらの葛藤の中でも、当該の歴史社会のアンビバレンスに結びつく可能性を有するものは何なのか。

まず、欧陽脩の生涯をその内面におこった変化を基準に区分してみよう。それらの中で重要なものは、三つの段階である。段階間の移行には当然、深刻な内面の葛藤を引き起こしたと考えられる。第一段階は、生まれてから、科挙に合格し希望に満ちた官僚生活をスタートさせた青年前期の頃まで。第二段階は、青年期に特有な浮薄な生活を反省し、その反省の上に立って、儒学的教養を単に科挙合格の手段とみるのではなく、自己の人格を陶冶し、自己存立のための依拠すべき体系として目覚めた青年後期。第三段階は、儒学的精神に自己の全てをかけて立ち向かった政治改革に挫折し、その挫折を一つの契機として一種の宗教的覚醒を遂げた壮年期³²。壮年期の宗教的覚醒は、老境に入るにつれて一層の深化をみた。これらの段階を具体的年齢でいうと、第一から第二への移行は三十歳前後、第二から第三へは四十歳前後である。ところで、これらの中で注目すべきは、第三段階であろう。この段階で欧陽脩の内面におこった変化は、現実社会との格闘によってもたらされたからである。

ここで誤解を招かぬように断っておくと、「宗教的」という言葉は、必ずしも既成の宗教を意味していないことだ。郭預衡氏が前掲の論文で指摘するように、欧陽脩は生涯を通じて、仏教を初めとして既成の

宗教には絶えず批判的で、それらへの帰依という事実もないのである。だが、慶暦の改革が挫折した後、すなわち四十歳を過ぎてからのかれの言動をみると、「生」にたいする根源的な問いかけというようなものを色濃く滲ませてくる。そのような「生」という自己の根源への洞察とは、言いかえると、やがて肉体的に終焉を迎える限りある自己に心の底から気づき、それに対面し、そしてかかる有限の存在としての自己をいかにして超えるかを探求してゆくことなのではないか。宗教とは本来、こうした「生」にたいする根源的な問いかけに発するものだとするれば、欧陽脩の壮年におこってくる内面の変化は、まさに一種の「宗教」的覚醒といってよいだろう。

そもそも、壮年期に至るまでの欧陽脩が最も信頼したのは、儒教的合理精神であった。それによってかれは、経学を初めとする学問諸分野に新生面を切り開いた。そして、その潑刺たる精神は、政治の改革にも向けられた。慶暦の改革への主体的参加は、その所産である。ここでは何よりも、政治に携わる士大夫は真の儒教的合理精神と倫理を体得せねばならず、そのため官僚の人格の練磨が急務とされた。だが、あまりにも性急な改革の実施は、やがて官僚間に不満と反発を引き起こし、改革は挫折してしまふ³³。欧陽脩は改革がほぼ頓挫した慶暦五年（一〇四五）に、反改革派の画策で左遷の憂き目を見た。あたかもこの時期を境として、かれは相継いで友人や知己の死に遭遇し、また若い頃³⁵からあまり丈夫でなかった身体が、次第に衰弱を増していったのである。こうしたことは、欧陽脩が有限の自己を認識し、「生」への根源的な問いかけをする契機の一つになったであろう。と同時に、かれの内面に変化をもたらした大きな要因は、儒教的合理精神を掲げて進めた改革の挫折ではないだろうか。左遷後に書かれた「醉翁亭記」に漂う現実逃避の姿勢は、挫折感と挫折に伴う心の内部の葛藤を他人に悟られまいとする韜晦であるように私には感じられる³⁶。それだけに、

その葛藤は深刻であったはずで、事実、この左遷より以後、直截な合理性の追求や主張は少なくとも表面からは姿を消してくるように思われる。とすれば、この時期の葛藤の具体相を闡明にしなければならぬが、それだけの準備が現在の私にはなく、今後の探求に俟たねばならない。とまれ、歐陽脩の四十歳前後に起こった内面の変化には、特殊個人的と同時に、当該の歴史社会に結びつくような問題性を含んでいると思われる。当時の宋代社会の具体相については矢張り現在の私には、それを明らかにするだけの準備がないが、しかし歐陽脩の内面に一大転機を迫るだけの矛盾・対抗を孕んでいたと想像はできよう。

さて、問題を初めにもどそう。歐陽脩の諸足跡をどのようにに統一的・整合的にとらえるかという問題である。さきに述べたように、歐陽脩は四十歳前後に「生」への根源的な問いかけを通じて、「宗教的覚醒を遂げてゆく。それは少し言葉をかえていうならば、有限の存在としての自己をいかにして超えるかということであった。とすれば、人生の黄昏の時期になってたどりつくこうした心的状況から、かれのたどった全足跡をそれに至る過程として整序づけることが可能なのではないか。この視角の正統性は、歐陽脩の晩年のエピソードからも立証できると思われる。すなわち、かれは、それまで書いてきた文章に刻苦して手を加えたが、こうした仕事をするのは、後世の人びとを恐れるがゆえであると語った⁽³⁷⁾という。悠久の時間の流れの中に自分の残した成果を委ねることによって、有限の存在としての自己を超越しようとしている。

以上で一応の展望はできたように思われるが、最後にもう少し想像を逞しくして筆を擱くことにしたい。思うに、時代精神にも、歐陽脩個人にみたような変遷があるのではないか。仁宗朝を頂点とし、王安石の改革の時期に最後の残照をみる合理的精神は、やがて熙寧以後、士大夫たちが仏教を主とする宗教への帰依や老荘思想への傾斜を⁽³⁸⁾

みせてゆくなかで影をひそめてゆく。一一二七年の靖康の変をみるまでもなく、北宋社会はすでに精神的な死に向いつつあった。その意味で、この時期、歐陽脩や王安石の故郷である江西地方に基盤をおく、六朝時代の許遜を始祖とする浮明忠孝道という道教の一派が、その宗派組織を整え、士大夫の間にもその教えが浸透してゆくのは極めて興味⁽³⁹⁾ぶかい。時間の軸を少し長くにとって考えてみると、歐陽脩の問題も更なる広がりを見せてくるといえよう。(一九八四年、九月三〇日稿)

註

- (1) 宋代以降の士大夫の定義の仕方については様ざまあると思うが、ここでは私は島田虔次氏の所説に従っておきたい(『中国における近代思维の挫折』第四章「一般的考察——近世士大夫の生活と意識」筑摩書房、一九四九年)。
- (2) 宮崎市定「宋代の士風」(『アジア史研究』四、東洋史研究会、一九六四年所収)。
- (3) 『宋代名人伝 (Sung Biographies)』(台湾南天書局、一九七八年)の劉子健氏による歐陽脩の紹介記事。
- (4) *Ou-yang Hsiu: An Eleventh-Century Neo-Confucianist*, pp. 174-175. Stanford U. P., 1967.
- (5) 『歐陽脩詞研究及其校注』(台湾文史哲出版社、一九八二年)。
- (6) 近年では、たとえば、杜維沫・陳新選注『歐陽修文選』(人民文学出版社、一九八二年)。
- (7) 『歐陽文忠公集』居士集卷三三「梅聖俞墓誌銘」、同卷四二「梅聖俞詩集序」。前掲張氏著書、第四章「文窮而後工」。
- (8) 『歐陽修の生平与學術』(台湾文史哲出版社、一九八〇年)一八六頁。
- (9) 最近、船津富彦氏は、歐陽脩の詩論に関する論文を発表した。氏によると、従来の研究では歐陽脩の詩論で重要な点が二・三のみがされ、また先学と意見を異にする点があるという。しかし、率直に言ってこの論文は、

史料の誤読と論証の不備に満ちており、氏の主張するような意図が闡明にされたとは考えにくい（『歐陽脩の詩論を巡るいくつかの問題』『東洋大学文学部紀要』三七集、一九八四年）。

(10) 『歐陽文忠公集』附録卷五「事迹」〔この「事迹」は、歐陽脩の子の発らの手になるものである〕。

(11) しかしながら、南宋の中頃まではかなりの程度まで残存していたらしい（曾宏父『石刻鋪叙』卷下「六一先生集古録」〔知不知齋叢書』第一〇集所収〕）。

(12) 拙稿「歐陽脩における族譜編纂の意義」〔名古屋大学東洋史研究報告』6、一九八〇年〕。

(13) James T. C. Liu, *op. cit.*, p. 110.

(14) 「新五代史撰述の事情」〔史学雑誌』五〇—一一、一九三九年〕。佐中氏以前においては、この問題に関する見解は曖昧で、それゆえに、『新唐書』の編纂の方が『五代史記』よりも先行するとの説もあらわれていた。

内藤湖南さえも、そのように考えていたふしがある（『支那史学史概要』『内藤湖南全集』巻一一、筑摩書房、一九六九年所収、四九二頁）。その意味で、『五代史記』の編纂年代、とりわけその撰述の開始を確定しようとしたこの研究は、画期的なものといえよう。

(15) 「歐陽脩の史学思想」〔加賀博士退官記念中国文史哲学論集』講談社、一九七九年）、「歐陽脩の思想的基盤——五代史記論贊をめぐって」〔竹内照夫博士古稀記念中国学論文集』北海道大学文学部中国哲学研究室、一九八一年〕。

(16) 『五代史記』の土人観」〔東洋史研究』三八—二、一九七九年）、「歐陽脩における歴史叙述と慶曆の改革」〔史林』六六—四、一九八三年〕。

(17) 前近代中国の歴史について、解放後、どのような見解がとられてきたかの変遷に関しては、中華書局版二十四史の各「出版説明」に端的に窺える。「出版説明」の内容の変遷については、小倉彦彦氏が要領をえた紹介をしている。ただ、氏の紹介は論文の発表された年次からして当然ながら、四人組以後に言及はない（『現代中国における二十四史』『歴史学研究』四

三九号、一九七六年）。

(18) 趙呂甫「歐陽修史学初探」〔歴史教学』一九六三年第一期）、柴徳廣「論歐陽修的『新五代史』」〔人民日報』一九六五年七月二日〕。なお、両論文ともに『中国史学史論集』（上海人民出版社、一九八〇年）に所収。

(19) 最近、松崎光久氏は柴氏と似た着眼点から論文を発表している。すなわち、欧陽脩は「華夷論」の立場をとっている以上、当然、『五代史記』にもその立場の反映が考えられるにもかかわらず、夷狄の王朝である金の章が『旧五代史』よりも『五代史記』をなぜ重視したのか、と。氏はこの発問に立って、それを解く鍵を両書の契丹にたいする態度に求め、両書の契丹伝を中心とする契丹関連記事の比較を試みてゆく。そして、比較の結果、次のように結論づける。欧陽脩の「華夷論」的要素は、『五代史記』には認めがたく、また契丹の内情や中国への侵入を伝えた記事にも悪意と侮蔑や、中国人の異民族にたいする敵愾心を煽るようなものは含まれていない。それによつて、『旧五代史』の記事の方が、異民族にたいする悪感情を抱きやすい内容となっている。かくて、異民族王朝の金は『五代史記』の方を選択したのだ、と。氏の着眼点は卓抜で、論の展開もスリリングで興趣に富むのだが、推論が目立ち、論証にも多くの不安が残る（『削去薛居正五代史攷』『中国正史の基礎的研究』早稲田大学出版部、一九八四年）。

(20) 陳光崇「欧陽脩の史学」〔宋史研究論文集』上海古籍出版社、一九八二年所収〕。その他、最近の論文では、管見のかぎり、宋衍申「欧陽修治史的求实精神」〔中国歴史文献研究集刊』第二集、湖南人民出版社、一九八一年所収）、姚瀛艇「論『新五代史』的人物評価」〔中国古代史論叢』第一輯、福建人民出版社、一九八一年）がある。宋論文は、陳光崇論文と同じく、欧陽脩の史学の特色を実証的、客観的に紹介している。ただ、叙述の中に不正確な箇所や明らかな誤謬もみられる。姚論文は表題のとおり、『五代史記』における人物評価の仕方を紹介し解説したもののだが、該書の論理構造まで踏み込みようとしており、その点で、これまでの中国人研究者の論文では異色である。ただ、その叙述の中には前掲拙稿『五代史記』の土人観」とよく似た例証と論理が展開されていて気にかかる。

- (21) 欧陽脩の「実事求是」の態度を高く評価した論文としては、かれの歴史分野を扱ったものではないが、鄭涵氏の「欧陽修天人觀試探」(『宋史論集』中州書画社、一九八三年)がある。この論文は、欧陽脩の天人相関説への懷疑について、その考えの諸特徴を示すと同時に、あわせて北宋思想史上の天人相関説の変遷過程を明らかにしようとしたものである。また、この論文は、それと明示していないが、文脈から中華書局版『新五代史』の「出版説明」と分かる文章の、欧陽脩の天命觀の紹介にたいして痛烈で執拗な批判をおこなっている。
- (22) 前掲拙稿「欧陽脩における歴史叙述と慶曆の改革」。
- (23) 朱弁『曲洧旧聞』卷三に、「欧公在穎上、日取新唐書列伝、令子斐誦、而公臥聽之、至藩鎮伝叙、嗟賞曰、若皆如此伝、其筆力不可及也」とある。
- (24) 中国語版の表題は、『欧陽修の治学与從政』(香港、新亜研究所、一九六三年)である。英文版については、註(4)参照。
- (25) 『東洋学報』四六一三(一九六三年)。
- (26) *Journal of Asian Studies*, xxiv-1, 1964.
- (27) *Journal of Asian Studies*, xxvi-3, 1967.
- (28) 『學術論文集』(北京師範大学出版社、一九八二年)所収。
- (29) 安徽人民出版社、一九八一年。
- (30) E. G. Pulleyblank, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, vol. 28, 1968.
- (31) ここという伝統的な伝記のスタイルとは、正史の列伝に代表されるような、個人の公的・外面的な生活を中心とし、個人の私生活における心理の内奥まで踏み込んだ記述をしない態度を指すようである。
- (32) (33) 前掲拙稿「欧陽脩における歴史叙述と慶曆の改革」。
- (34) 慶曆六年(一〇四六)には尹洙、慶曆八年(一〇四八)には蘇舜欽が死去している。
- (35) 王銍『默記』卷中に、「晏元献以前兩府作御史中丞、知貢举、出司空掌輿地之凶賦、既而举人上請者、皆不契元献之意、最後一目眊瘦弱少年、出至簾前、(中略)蓋意欲举人自理会得寓意于此、少年举人、乃欧陽公也、是榜為省元」(晏元献とは晏殊のこと)とある。欧陽脩の四十歳以後の健

- 康の衰弱については、蔡世明氏前掲書の三八・三九頁を参照。
- (36) 合山究氏は、この貶謫を契機に欧陽脩が称した「醉翁」という雅号などを一つの手掛りとして、宋代になって文人意識の成立したこと、すなわち政治的世界とは全く異なる次元の私的な趣味的世界が確立し、士大夫が二重構造の世界をもつことになったと説いている(『雅号の流行と宋代文人意識の成立』『東方学』三七輯、一九六九年)。しかし、宋代以後の士大夫が、政治闘争に敗れて趣味的世界に浸るのは、一種の韜晦であると私は考える。政治的世界からの一八〇度の転回だというような、単純な事柄ではなからう。
- (37) 沈作喆『寓簡』卷八に、「欧陽公晚年、嘗自竄定平生所為文、用思甚苦、其夫人止之曰、何自苦如此、当畏先生嘖耶、公笑曰、不畏先生嘖、却怕後世笑」とある。
- (38) 王闢之『澠水燕談錄』卷三に、「近年士大夫多脩仏学、往往作為偈頌、以發明禅理、独司馬温公患之云々」とある。また、葉夢得『避暑録話』卷上に、「自熙寧以来、学者争言老莊」とある。
- (39) 秋月観暎『中国近世道教の形成』(創文社、一九七八年)は、この淨明忠孝道の生成と發展過程を主に教義史の上から論じたものである。また、葉夢得『避暑録話』卷上に、「宣和間、道術既行、四方矯偽之徒、乘間因人、以進者相繼、皆假古神仙為言、公卿從而知之、信而不疑、有王資息者、淮甸間人、最狂妄言、師旌陽、(中略)資息後有罪誅死云々」(旌陽は許遜のこと)とある。
- (付記)
- 小稿は、一九八四年二月末に名古屋大学大学院研究生の報告書として提出したものに加筆したものである。したがって、小稿は名古屋での生活の中で生み出された最後の仕事となった。長い修学期間中、未熟な私に親身な御助言を下された、谷川道雄・森正夫・重松伸司・江村治樹各先生と、いちいち御尊名は挙げぬが、辛辣な批判でいつも私を鼓舞して下さった名古屋大学東洋史研究室の先輩・同輩・後輩各位に感謝をしたい。これまでの私のささやかな仕事は、このようになぐまれた環境の中で育まれたのだから。